



TOHOKU
UNIVERSITY

東北大学

女子学生入学

百周年記念シンポジウム

リケジョの百年から

未来の女性リーダー

育成に向けて

2013

8/8 木

13:00~17:10 (12:30開場)

場 東北大学 川内キャンパス

所 マルチメディア教育研究棟 2階
マルチメディアホール(入場無料)

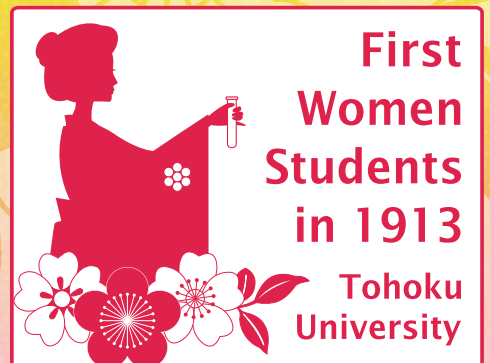
ホームページ <http://www.morihime.tohoku.ac.jp/100th>

お問い合わせ 東北大学総務部総務課 電話:022-217-4811

主催: 東北大学/東北大学男女共同参画委員会

共催: 毎日新聞社/講談社Rikejo

後援: 文部科学省/内閣府男女共同参画局/日本学術会議



First
Women
Students
in 1913

Tohoku
University

ごあいさつ



東北大学 総長
里見 進

東北大学女子学生入学100周年記念シンポジウムの開催にあたり、主催者を代表して、御挨拶申し上げます。

東北大学は、明治40(1907)年に東京帝国大学、京都帝国大学に次ぐ3番目の帝国大学として建学され、以来、時代のフロントランナーとして、「研究第一」、「門戸開放」、「実学尊重」の理念のもと、指導的人材を育成することによって、平和で公正な人類社会の実現に貢献することをその使命としてきました。

遡ること、東北大学が誕生した明治末頃の日本の大学は、旧制高校を卒業した男子学生のための学校であり、正規の学生身分で女性が大学に入学することは考えられていませんでした。

そのような中、大正2(1913)年に沢柳政太郎初代総長が難関を突破した3人の女子学生に対し、本学(理学部)への入学を許可したことは、建学理念の一つである「門戸開放」をあらゆる実績でもあります。

卒業後の女子学生は、大学院への進学、博士の学位取得や海外留学をされるなど、女性研究者の先駆けとなりました。今から100年も前に、当時の3名の女子学生が研究の道を志し、研究者として歩まれたことには、誠に敬服の念を禁じ得ません。

本日のシンポジウムでは、女子学生入学から100年を迎えることを一つの節目ととらえ、女性研究者の歴史を振り返るとともに、今後の活躍に向けた方策について議論を深め、未来を探る「リケジョの100年から未来の女性リーダー育成に向けて」をテーマに開催します。

米国National Science Foundation 元長官のリタ先生や英国王立アカデミー会員のベロニカ先生をはじめ、国内外よりお招きした世界トップレベルの女性リーダーや女性の活躍を支える男性にご講演いただくなど、まさに「未来の女性リーダー」について、学内外の皆様と共に考えていくこととしております。

また、輝かしい伝統を受け継ぎ、女性研究者の育成支援を力強く推し進めるため、東北大学は今後10年間を見据えた7つの行動指針を策定します。

今回のシンポジウムの成果が本学及び全国の大学のみならず、広く男女共同参画社会の実現に寄与できますことを祈念いたしまして御挨拶とさせていただきます。

平成25年8月8日



リケジョの百年から
未来の女性リーダー育成に向けて



プログラム

13:00 ~ 13:10 (10分)

開会挨拶 東北大学 総長 里見 進
来賓挨拶 政策研究大学院大学 アカデミックフェロー 黒川 清氏
沖縄科学技術大学院大学 副学長 久保 真季氏

13:10 ~ 13:20 (10分)

第一部 東北大学における男女共同参画の歴史と
女性リーダーからの提言
— 東北大学における男女共同参画の歴史とこれまでの取組 —
明治大学 教授 辻村 みよ子氏
(元東北大学 教授、ディスティングイッシュトプロフェッサー)

13:20 ~ 13:30 (10分)

黒田光太郎氏への感謝状贈呈

13:30 ~ 14:20 (50分)

第二部 世界の女性リーダー (アカデミック)による基調講演 (1)
Distinguished University Professor, University of Maryland, US
Dr. Rita. R Colwell 氏
Fellow, the Royal Society, UK
Dr. Veronica van Heyningen 氏

休憩: 10分(14:20 ~ 14:30)

14:30 ~ 15:15 (45分)

第三部 男性から女性リーダーへの応援メッセージ
及び女性リーダーからの未来に向けたメッセージ
医師 向井 万起男氏
株式会社東芝 デザインセンター 参事 兼 研究開発センター
インタラクティブメディアラボラトリー 研究主幹 福島 理恵子氏
北海道大学 教授 高橋 幸弘氏

15:15 ~ 15:40

世界の女性リーダー (アカデミック)による基調講演 (2)

東京理科大学 教授 黒田 玲子氏

休憩: 10分(15:40 ~ 15:50)

15:50 ~ 16:50 (60分)

第四部 リケジョの未来とダイバーシティを考える
(1) プレイベント総括報告
(2) パネル・ディスカッション
コーディネーター: 毎日新聞社 科学環境部編集委員 元村 有希子氏
パネリスト: 政策研究大学院大学 アカデミックフェロー 黒川 清氏
医師 向井 万起男氏
株式会社東芝 デザインセンター 参事 兼 研究開発センター
インタラクティブメディアラボラトリー 研究主幹 福島 理恵子氏
北海道大学 教授 高橋 幸弘氏
東北大学女性研究者育成支援推進室 副室長
原子分子材料科学高等研究機構 機構長 小谷 元子
東北大学大学院生命科学研究所 (D3)
サイエンス・エンジェル 高橋 さやか

16:50 ~

東北大学における男女共同参画推進のための行動指針 発表

東北大学 総長 里見 進

17:00 ~

来賓挨拶 内閣府総合科学技術会議 議員 原山 優子氏

17:05 ~

閉会挨拶 東北大学男女共同参画委員会 委員長 植木 俊哉
総合司会: 東北大学総長特別補佐(男女共同参画担当) 大隅 典子

男女共同参画委員会 委員長挨拶及び基調講演者紹介



東北大学
男女共同参画委員会
委員長
植木 俊哉

本日のシンポジウムは、「リケジョの100年から未来の女性リーダー育成に向けて」をテーマとして、開催いたします。

東北大学では、全国の大学に先駆けて、女性研究者の育成支援について様々な取組が進められてきました。

学内での男女共同参画委員会の発足や、平成14年の「男女共同参画推進のための東北大学宣言」を指針に、学内保育園の設置・運営を含めた両立支援体制を充実させました。平成18年度からは、特に女性研究者の支援のため「女性研究者育成支援推進室」を設置し、平成20年度までの3年間、文部科学省の補助を受けて自然科学分野における女性科学者のキャリアパス形成にとって障害となっている様々なハードルを乗り越えることができるよう支援する「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」を実施し、平成21年度からはこの成果を踏まえ、大学独自の事業として事業を継続しています。

次世代育成に関して、自然科学系の女子大学院生をサイエンス・エンジェル(SA)に任命し、女性研究者のロールモデルとして、セミナーやイベントへの参加を通じ、科学の魅力・研究の面白さを小・中・高校生などへ直接伝える活動を続けています。

一方、女性研究者の採用加速や能力・職階のジャンプアップを図る「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」についても、同じく文部科学省の支援を受け平成21年度から実施していますが、今後も更なる充実を図っていききたいと思います。

女子学生入学から100年を迎える東北大学において、女性研究者の活躍の場は益々広がっており、今後も様々な取り組みを通じて女性研究者の育成支援活動の推進に励んでまいりたいと存じます。

どうぞ皆様の一層の御支援と御協力をよろしくお願い申し上げます。

平成25年8月8日

基調講演者紹介



黒田 玲子

教授 東京理科大学総合研究機構・東京大学名誉教授
(化学・生物学 特にキラリティーの科学)

経 歴 東京大学大学院理学系研究科博士課程修了(理学博士)、ロンドン大学キングスカレッジ research associate, research fellow, honorary lecturer, 英国癌研 non-clinical senior scientist などを経て、東京大学大学院総合文化研究科教授。東大総長特任補佐・経営協議会委員、東大科学技術インタープリター養成プログラム代表、教育改革国民会議議員、総合科学技術会議議員、中教審委員、内閣府男女共同参画推進連携会議委員、HFSP 科学者委員会副委員長、ICSU (国際科学会議) 副会長等を歴任。学術会議会員、スウェーデン王立科学アカデミー会員等

著書など 「生命世界の非対称性」(中公新書1992)、「科学を育む」(中公新書2002)、『社会人のための東大科学講座』編集および第1章 Pp1-48「科学技術と社会、なぜ対話が必要なのか」(講談社2008)等。猿橋賞, 日産科学賞, 山崎貞一賞, 文部科学大臣表彰, ロレアル・ユネスコ女性科学賞等

応援メッセージ ● 世界の国々に目を向けよう。宇宙やミクロの世界、過去や未来にも!



Dr. Rita R. Colwell

**Distinguished University Professor, University of Maryland College Park and
Johns Hopkins University Bloomberg School of Public Health
Senior Advisor and Chairman Emeritus, Canon U. S. Life Sciences
Chairman and President, CosmosID, Inc.**

Born in Beverly, Massachusetts, Dr. Rita Colwell holds a B.S. in Bacteriology and an M.S. in Genetics, from Purdue University, and a Ph.D. in Oceanography from the University of Washington. Dr. Colwell served as the 11th Director of the National Science Foundation, 1998–2004. In her capacity as NSF Director, she served as Co-chair of the Committee on Science of the National Science and Technology Council. One of her major interests includes K–12 science and mathematics education, graduate science and engineering education and the increased participation of women and minorities in science and engineering. Before going to NSF, Dr. Colwell was President of the University of Maryland Biotechnology Institute and Professor of Microbiology and Biotechnology at the University Maryland. She was also a member of the National Science Board from 1984 to 1990. Dr. Colwell has previously served as Chairman of the Board of Governors of the American Academy of Microbiology and also as President of the American Association for the Advancement of Science and many other societies. She has been awarded 55 honorary degrees from institutions of higher education, including the 2006 National Medal of Science awarded by the President of the United States. Dr. Colwell has held many advisory positions in the U.S. Government, nonprofit science policy organizations, and private foundations, as well as in the international scientific research community. She is a nationally-respected scientist and educator, and has authored or co-authored 17 books and more than 800 scientific publications. She produced the award-winning film, *Invisible Seas*, and has served on editorial boards of numerous scientific journals. Her interests are focused on global infectious diseases, water, and health, and she is currently developing an international network to address emerging infectious diseases and water issues, including safe drinking water for both the developed and developing world, in collaboration with Safe Water Network.



Dr. Veronica van Heyningen

**Fellow, The Royal Society, UK
Honorary Professor, University of Edinburgh**

Born in Hungary, Veronica was at school in England, and an undergraduate at Girton College, Cambridge studying Natural Sciences including Genetics. After a Master of Science degree from Northwestern University, she gained a doctorate at the University of Oxford. A prestigious Beit Memorial Fellowship enabled her to move to a well-known lab in Edinburgh when her husband was appointed University Lecturer in Biochemistry there. Their son and daughter were born in Edinburgh, in 1975 and 1976. In 1977 Veronica took a tenure-track postdoctoral position at the Medical Research Council's Human Genetics Unit (MRC HGU). In 1984, as a tenured junior group leader, she embarked on a fruitful interaction with Nick Hastie and several international collaborators to identify the genes associated with a childhood kidney tumour and an eye malformation named aniridia (absence of the iris). Much subsequent work centred on the aniridia gene: how it fulfils its many functions and how it interacts with other eye disease genes. The 1993 award of a Howard Hughes International Research Scholarship from the USA provided early recognition and support. Around this time, Veronica was appointed Head of Section at MRC HGU, allowing her to mentor not only her own students and postdocs, but also young group leaders. Other honours include Fellowships of the Royal Society and Academy of Medical Sciences, and EMBO Membership. In 2010 Veronica was awarded a CBE (Commander of the British Empire). She also served as President of the European Society of Human Genetics and of the Genetics Society. Membership of the Human Genetics Commission for six years gave her an opportunity to explore important ethical issues in genetics. In 2012 Veronica retired from MRC HGU, but continues to pursue several projects there and at University College London.

来賓・講演者・パネリスト紹介



黒川 清 政策研究大学院大学アカデミックフェロー、日本医療政策機構代表理事
来賓／パネリスト

経歴 東京大学医学部卒(医学博士)。1969年～84年在米、1979年カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA) 医学部内科教授、89年東京大学医学部第一内科教授、96年東海大学医学部長、2003～07年日本学術会議会長、内閣府総合科学技術会議議員、内閣特別顧問(2006～08年)、イノベーション25戦略会議座長、内閣特別顧問(2006～08年)などを歴任。InterAcademy Council、International Council of Science等の国際科学者連合体の役員、委員を務め、WHO コミッショナー(2005-2009年)、Alexandria 図書館(エジプト)、KUSTAR (アブダビ)、A*STAR (シンガポール)などのボードメンバー、Member of GSIAC of Malaysia's Prime Minister、東京大学プレジデントカウンスルメンバー。その他、国会福島原子力発電所事故調査委員会委員長(2011年12月～12年7月)など。Institute of Medicine of National Academies USA、米国内科学会マスター等。現在、日本医療政策機構代表理事、IMPACT Foundation Japan 会長兼ファウンダー、東京大学名誉教授、MIT、コロンビア大学客員研究員。Foreign Policy 100 Top Global Thinkers 2012 に選ばれ、AAAS Scientific Freedom and Responsibility Award (2012)を受賞。
ブログ：<http://www.kiyoshikurokawa.com>

応援メッセージ ● 女性の活躍なくして日本の将来なし



久保 真季 沖縄科学技術大学院大学 副学長(文部行政、科学技術・学術行政)
来賓

経歴 1982年4月、東京大学法学部卒業後、文部省に入省。広報室長、生涯学習政策局調査企画課長、米国科学財団(NSF)フェロー、内閣府男女共同参画局推進課長、日本学術振興会総務部長、内閣府政策統括官(科学技術政策担当)付参事官、国立女性教育会館理事・事務局長等を経て、2011年11月から現職。女性研究者支援策の創設にも関わる。2006年度及び2008年度には、大阪大学客員教授(工学部「科学技術政策論」)を兼務。
著書など 科学技術政策、特に女性研究者や若手研究者の支援策について、日本物理学会、応用物理学会、地球惑星科学連合、日本生化学会、日本分子生物学会、日本薬学会等の学会や大学で講演等。

応援メッセージ ● レッツ・チャレンジ、女性なればこそ大胆に。



原山 優子 内閣府 総合科学技術会議 有識者議員
(科学技術イノベーション政策論、高等教育論)
来賓

経歴 ジュネーブ大学経済学部 助教授、経済産業研究所フェロー、東北大学大学院工学研究科 教授、経済協力開発機構 科学技術産業局次長を歴任し、2013年3月より現職。
著書など 「シリコンバレーの産業発展とスタンフォード大学のカリキュラム変遷」青木昌彦(編)『大学改革 課題と争点』(東洋経済新報社、2001年)、『産学連携』(編著者、東洋経済新報社、2003年)、『産業革新の源泉 ベンチャー企業が駆動するイノベーション・エコシステム』(編著者、白桃書房、2009年)

応援メッセージ ● まずは個の行動、そしてそれを社会のうねりへとつなげていく。変革の源に女性あり。



辻村みよ子 明治大学法科大学院 教授（憲法、比較憲法、ジェンダー法学 [法学博士]）

講演

- 経歴** 一橋大学法学部助手・成城大学専任講師・助教授・教授を経て1999年より東北大学教授。2003年—2013年21世紀COE・グローバルCOE拠点リーダー・「ジェンダー平等と多文化共生」研究センター長、内閣府男女共同参画会議議員、日本学術会議第19-22期(科学者委員会男女共同参画分科会元委員長) (2013年3月まで東北大学大学院法科大学院教授、東北大学DP同男女共同参画委員会副委員長)
- 著書など** 『憲法』(第4版、日本評論社2012)、『代理母問題を考える』(岩波書店、2012)、『ポジティブ・アクション』(岩波書店、2011)、『憲法から世界を診る<講演録>』(法律文化社、2011)、『比較憲法(新版)』(岩波書店、2011)、『ジェンダーと法(第2版)』(不磨書房、2010)、『フランス憲法と現代立憲主義』(有信堂、2010)、『憲法とジェンダー』(有斐閣、2009 [第2回昭和女子大学女性文化研究賞受賞])など多数。

応援メッセージ ● 学術分野に残存するジェンダー・バイアスを科学的に解明し克服するため、大学や研究者の果たす役割は限りなく大きい。今こそ、「先駆け」としての取組みの飛躍と連帯に期待したい。



向井万起男

医師（病理学、腫瘍病理）

講演／パネリスト

- 経歴** 病理医。日本初の女性宇宙飛行士、向井千秋の夫。作家としても活躍しユーモアを含んだエッセイに定評があり、『謎の1セント硬貨』で講談社エッセイ賞受賞。
- 著書など** 『君について行こう—女房は宇宙をめざした』(講談社、1995年)
『女房が宇宙を飛んだ』(講談社、1998年)
『ハードボイルドに生きるのだ』(講談社、2003年)
『愛人の数と本妻の立場—ヤワラカアタマ入門』(講談社、2005年)
『謎の1セント硬貨 真実は細部に宿る in USA』(講談社、2009年)

応援メッセージ ● 踊らされずに踊ることです



福島理恵子

(株)東芝デザインセンター参事 兼 研究開発センターインタラクティブメディアラボラトリー研究主幹

講演／パネリスト

- 経歴** 1971年東京都生まれ。東北大学理学部化学第二学科卒業後、同大学院理学研究科化学専攻修士課程修了。1995年に東芝入社。研究開発センターにて、液晶の配向(並び)を改善する配向メカニズムを研究。30歳で出産、2002年に復帰。復職後から従事した裸眼3Dディスプレイの研究開発は、2010年に東芝が世界で初めて製品化した眼鏡がいらぬ3Dテレビ(グラスレス3Dレグザ™)につながった。2012年からはデザインセンターにて、UX(ユーザー経験価値)視点の製品開発プロセスの具体化に従事。
- 受賞歴** 研究開発した裸眼3Dディスプレイについて、2005年「第57回神奈川県発明考案展覧会／川崎市長賞」「日本光学会／光設計優秀賞」、2007年「映像情報メディア学会／技術振興賞 開発賞」、2010年「発明協会／全国発明表彰21世紀発明賞(第二表彰区分)」、2011年「文部科学省／平成23年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞(研究部門)」、「映像情報メディア学会／丹羽高柳賞業績賞」を、企業での研究開発業務と家庭の両立について、2010年「日経BP社／ウーマン・オブ・ザ・イヤー2011大賞」、2011年「APEC Women and the Economy Summit /女性イノベーター表彰」を受賞。

応援メッセージ ● 未知の領域でも恐れず、主体的に仕事をする事です。そうすることで経験が血肉になり、成長できます。最初は小さい仕事から。でも少しずつハードルをあげれば、必ず大きな仕事ができるようになります。You can do it, girl!

講演者・パネリスト紹介



高橋 幸弘

北海道大学・大学院理学院 教授

講演／パネリスト

経 歴 平成3年7月～平成5年3月 東北大学・理学部 助手
第33次南極地域観測隊に越冬隊員として参加
平成7年4月 東北大学・理学部・助手
平成10年7月 東北大学・理学部(大学院理学研究科)・講師
平成21年1月 東北大学・大学院理学研究科・准教授
平成21年9月～ 北海道大学・大学院理学院・教授

応援メッセージ ● 自然体のあなたが輝ける時代を一緒に作りましょう。



小谷 元子

東北大学原子分子材料科学高等研究機構 機構長、主任研究員
(数学・幾何学)

パネリスト

経 歴 1983年：東京大学理学部数学科卒、1990年 理学博士
東邦大学理学部講師、助教授、東北大学大学院理学研究科助教授を経て、
2004年～至現在：東北大学大学院理学研究科教授
2008年～至現在 ディスティングイッシュト プロフェッサー
2012年～至現在 東北大学原子分子材料科学高等研究機構長

受 賞 2005年 第25回猿橋賞受賞「離散幾何解析学による結晶格子の研究」
2005年 東北大学総長特別賞受賞
2011年 東北大学総長教育賞受賞

社会貢献 日本数学会理事
内閣府総合科学技術会議科学技術イノベーション政策推進専門調査会、
文部科学省科学技術・学術審議会委員
日本学術会議連携会員・数理学委員

著書など 21世紀の数学—幾何学の未踏峰、日本評論社、宮岡礼子・小谷元子編、ポストモダン解析学、J.Jost 著 訳 小谷元子

応援メッセージ ● More is different. 相転移後の世界を楽しみにしています。



高橋さやか

東北大学大学院生命科学研究所 (D3)

パネリスト

研究内容 「紫外線誘発 DNA 損傷とその修復機構、紫外線耐性機構に関する解析」
植物は常に太陽光に含まれている紫外線 (UVB) に曝されて生育しており、UVB によって DNA に損傷が引き起こされている。この DNA 損傷を修復する酵素が、イネの紫外線耐性に関与していることが明らかにされている。さらに、この DNA 修復酵素は細胞内の全ての DNA を持つ器官に移動して、DNA の傷を修復することを見出した。DNA を持つ全ての器官に移動する酵素は他に類をみない。紫外線耐性機構を解明するために、より詳細な DNA 修復酵素の細胞内での移動のメカニズムの解析と、UVB 抵抗性と酵素の移動性の関連性についての研究を行っている。
H22年度からサイエンス・エンジェルとして出張セミナー、体験型科学イベント、活動報告会などに参加。

パネルディスカッション・コーディネーター／総合司会紹介



元村有希子 毎日新聞科学環境部 編集委員 (科学コミュニケーション、ジャーナリズム)

パネルディスカッション・コーディネーター

経 歴 福岡県出身。九州大学教育学部で臨床心理学を学ぶ。1989年、毎日新聞社入社。西部本社下関支局、福岡総局などを経て2001年から科学環境部。日本の科学技術を検証する「理系白書」とブログでの発信で2006年、第1回科学ジャーナリスト大賞を受賞。2007年秋から1年間、英国留学。2010年から科学環境部デスク。2013年春から現職。BSIF「ウィークリーニュース ONZE」キャスター。

著書など 「気になる科学」「理系思考」(いずれも毎日新聞社)、「理系白書」(共著、講談社)、「科学者ってなんだ?」(同、丸善出版)、「宇宙へ『出張』してきます」(同、毎日新聞社)など。

応援メッセージ ● 一度しかない人生。自分が夢中になれることを見つけて迷わず進んでください。失敗も糧になります。Go for it, リケジョ!



大隅 典子

東北大学大学院医学系研究科 附属創生応用医学研究センター
発生発達神経科学分野 教授
総長特別補佐(男女共同参画担当)

総合司会

1985年東京医科歯科大学歯学部卒。1989年同大学院歯学研究科修了。歯学博士。1989年同大学歯学部助手、1996年国立精神・神経センター神経研究所室長を経て、1998年より東北大学大学院医学系研究科教授(現職)。2006年～東北大学総長特別補佐(男女共同参画担当)、2008～2010年東北大学ディスティングイッシュトップフェッサー。2007年より東北大学グローバル COE「脳神経科学を社会へ還流する研究教育拠点」拠点リーダーを務める。2006年より東北大学女性研究者育成支援推進室副室長として振興調整費による「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」を推進、同年、女性研究者育成支援態勢整備の促進に貢献したとして、「ナイスステップな研究者2006」に選定。

応援メッセージ ● 自分を信じて、好きなことをやりとげよう!

東北大学サイエンス・エンジェル(SA)について

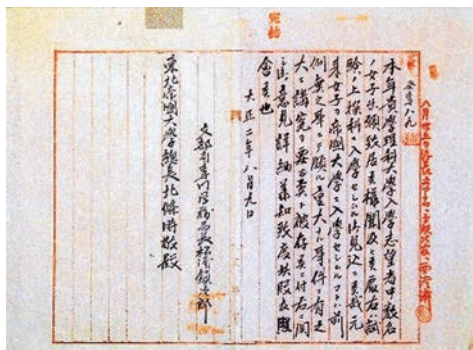
東北大学サイエンス・エンジェル(SA)は次世代の女性研究者の育成、また、次世代を担う小中高校生の身近なロールモデルとなり、科学の魅力を伝えることを目的として、平成18年度から平成20年度に実施された科学技術振興調整費「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」の一環として誕生しました。SAらは自然科学系の10部局に所属する博士課程前期(修士1年)から博士課程修了までの女子大学院生によって構成され、年度毎に学内公募制によって応募が行われ、採用者は総長によって任命を受けます。

平成21年度からは東北大学独自の事業として継続しており、小・中・高校へのお出張セミナー、東北大学オープンキャンパスでの女子高校生を対象としたセミナー、博物館などにおける科学イベントへの出展など、多くの方に自然科学の楽しさを伝えています。



東北大学における女子学生の歴史

女子学生の誕生



女子入学をめぐる文部省の質問状

東北大学は、日本初の「女子学生」が誕生した大学です。

東北大学が誕生した明治末頃の日本の大学は、旧制高校を卒業した男子学生のための学校であり、正規の学生身分で女性が大学に入学することは考えられていませんでした。

ところが、大正2年(1913)にその「常識」を破る事件が起こりました。

創立間もない東北帝国大学が、独自の判断で4人の女性の受験を認めたのです。

入学試験のさなか、文部省は「元来女子を帝国大学に入学せしむることは前例これ無きことにて頗る重大なる事件にこれあり大いに講究を要し候」云々と事情説明を求める書簡を大学に送りますが、大学は委細かまわず、黒田チカ、牧田らく、丹下ウメ3人の合格を発表、ここに日本初の「女子学生」が誕生することになったのです。

3人の女子学生はやがて卒業して女性初の「学士」となり、その後も副手や大学院生として数年間大学での研究生生活を送りました。

その後黒田は母校東京女高師(のちのお茶の水女子大学)の教員となりやがてオックスフォード大学等へ留学。帰国後は恩師真島利行のもとで理化学研究所の嘱託を兼ね、紅花の色素に関する研究等で業績を上げました。昭和4年(1939)には、日本国内では2番目の女性理学博士として、本学の学位を得ています。なお本学理学研究科では、こうした黒田の業績に因み、優れた業績を挙げた大学院生に対する賞として「黒田チカ賞」を平成11年(1999)に設けています。

また丹下は大学院進学後米国に留学。帰国後は母校日本女子大の教授となる一方やはり理化学研究所に入所し鈴木梅太郎のもとでビタミンの研究に従事、農学博士となっています。

牧田は黒田同様母校女高師に教員として戻りますが、洋画家・金山平三との結婚を機に退職、孤高の画家と呼ばれた金山を支える後半生を送りました。



黒田 チカ

牧田 らく

丹下 ウメ

戦前の女子学生



数学教室の女子学生(1924年)



法文学部の女子学生(1940年)

東北帝国大学への女子入学は、大正2年(1913)以降若干の中断期間がありますが、大正11年(1922)に2名の女性が理学部数学科に聴講生として入学。

翌年からは正規の学生としての受入も再開され、毎年女子学生が入学するようになります。こうした学生数の増加に伴い、昭和初期には「芝蘭会」という女子学生の親睦組織もつくられています。

この時期には、東京・京都を除く各地の帝国大学や私立大学等で女性の入学が認められるようになりますが、帝国大学のなかで最も多くの女子学生を集めたのは、やはり東北帝国大学でした。学問を志す全国の女性が法文学部や理学部を中心に「学都」仙台に集ってきたのです。

彼女たちは卒業後も各方面で、研究者や教育者として、あるいは様々な社会的・文化的活動において活躍をしています。



芝蘭会會員名簿
(1939年)

戦後の東北大学と女性の大学入学



如春寮の寮生(1950年頃)



第一回「女子学生の集い」(1979年)

戦争中、大学に学ぶ「女子学生」の数は増加しますが、勤労働員の強化という形で、彼女たちの学問の機会には奪われました。

戦争の終結と共に大学に戻り、失われた時間を取り戻すかのように学問に励んだ彼女たちは、やがて戦後の新しい時代を牽引する存在として活躍していくこととなります。

戦後の高等教育制度改変の中で、旧制高校一帝国大学という男性中心の大学入試制度が消滅し、

各大学で広く女性の入学が認められていきます。

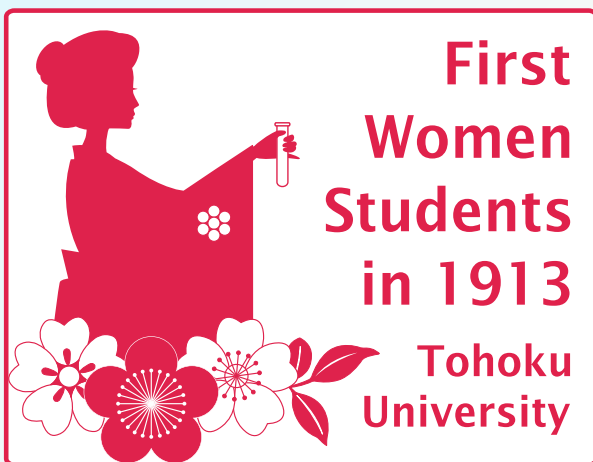
東北大学では昭和24年(1949)の新制大学発足と共に41名の女子学生が入学。戦前には見られなかった医学部や工学部などの学部に入学者も増えていきます。

その後半世紀以上の歴史の中で、女子学生の数は徐々に増えてきました。特に1980年代後半以降増加のスピードが加速しています。現在では約4,500人の学生(大学院生含む)が在籍しています。また女性教員の数もまだまだ少ないものの、徐々に増えてきています。

平成13(2001)年、東北大学では男女共同参画の推進のため「東北大学男女共同参画委員会」を設置し、翌年には「男女共同参画推進のための東北大学宣言」を採択し東北大学男女共同参画奨励賞(通称:沢柳賞)を設けました。「沢柳賞」という名称は、大正2年(1913)の3人の「女子学生」の誕生に主導的役割を果たした初代総長・沢柳政太郎の名前に因んだものです。

東北大学女子学生入学100周年記念のロゴマーク

Women student enrollment centennial commemoration logo



東北大学は1913年に日本で初めて女子学生3名の入学を認めました。このたびその100周年を記念し、今後百年の女子学生の活躍に期待して、ロゴマークを制定しました。本ロゴマークでは、試験管を持った女性が理学部化学科に入学した2名(黒田チカ、丹下ウメ)を象徴します。また、七曜紋は数学の空間充填問題にあたることから同数学科に入学した1名(牧田らく)を表すとともに、本学のシンボルでもある北斗七星(北の空に輝き、人々を導く星)も意味します。メインカラーの紅は、天然色素の研究をしていた黒田が博士号を取得した折に「紅(くれない)の博士」と呼ばれたことに因みます。

黒田チカ氏に関する資料寄贈について

黒田チカとその資料



黒田チカ
(大正5=1916年)

大正2年(1913)に日本初の女性大学生の一人として東北帝大に入学し、その後大正から昭和にかけてわが国女性化学者のパイオニア的存在として活躍した卒業生・黒田チカ(1884-1968)の関係資料が、このほどご遺族から本学に寄贈されることになりました。

黒田チカは佐賀県の生まれで、佐賀師範学校・東京女子高等師範学校(お茶の水女子大学の前身)を卒業。その後東京女高師の助教授に就任しますが、女高師の講師であった長井長義東京帝大教授の強い勧めもあり東北帝国大学を受験し合格、丹下ウメ・牧田らくとともにわが国初の女性大学生として入学しました。

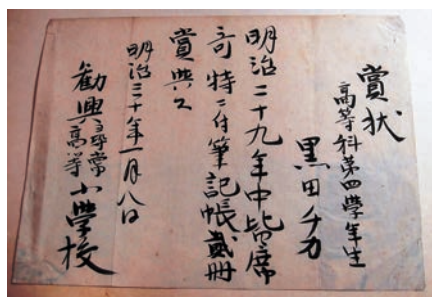
大学では戦前期の日本を代表する有機化学者・眞島利行の指導を受け、大正5年(1916)卒業にともない日本初の女性学士となりました。卒業後も二年間東北帝大で研究を続け、その後母校東京女子高等師範学校の教授に就任。大正10(1921)年からは文部省外国留学生として英国オックスフォード大学に2年間留学し、帰国後の大正15年(1926)からは恩師眞島が研究室を持つ理化学研究所の研究員もつとめました。昭和4年(1929)には紅花の色素カーサミンの研究により東北帝国大学から理学博士の学位を授与され、わが国2番目の女性理学博士となっています。その後も様々な天然色素の研究で成果をあげ、また多くの後進を育てています。戦後お茶の水女子大教授。日本婦人科学者の会の名誉会長もつとめました。

今回本学に寄贈されることとなった資料は、幼少時代から昭和43年の逝去までの彼女の生涯にわたる資料が含まれ、恩師眞島利行ほか周囲の様々な人々との間でやりとりした大量の書簡類、写

真、数多くの研究ノート、研究室で着用していた実験着などなど、明治から昭和という時代を生きた一人の科学者、一人の女性の全体像を知ることが出来る、大変貴重な資料群です。

黒田チカ資料は、今後東北大学史料館が保存管理し、整理が完了次第一般に公開する予定です。調査整理にはまだまだ時間がかかる見込ですが、来たる9月27日(金)から史料館で開催予定の企画展「女子学生誕生-100年前の挑戦」では、寄贈資料の一部を展示紹介いたします。

※写真はすべて今回の寄贈資料



高等小学校時代の賞状



黒田の研究ノート

黒田チカ賞

東北大学理学部の同窓生を主体とする青葉理学会では、毎年、優れた研究業績をあげた博士課程の女子学生数名を選び顕彰しています。

この賞は、東北大学の理学研究科および生命科学科の博士後期課程に在籍する女子学生が対象です。理学分野における女性研究者を育成することを目的として本賞は1999年に創設され、この15年の間に45名の女子学生が表彰されました。

詳細：東北大学 大学院 理学研究科・理学部 青葉理学会 ホームページ
<http://www.sci.tohoku.ac.jp/aoba-society/>



応援メッセージ



板東 久美子
文部科学審議官

東北大学が我が国大学の先駆けとして女子学生を入学させてから一世紀を迎え、記念シンポジウムが開催されますことを心よりお喜び申し上げます。東北大学では、最近でも、女性研究者支援や次世代育成のために、多様で革新的な取組を進めてきておられています。サイエンス・エンジェルはその中でも全国的に注目されている取組であり、小・中・高の生徒達に科学の魅力を伝える活動などにより、サイエンス・エンジェル自身が大きく成長するとともに、研究分野を超えたネットワークを広げています。また、女性研究者が活躍しやすい環境づくりも進むとともに、研究科・学部や研究組織の長など女性研究者がリーダーを務めるケースが実際に出てきているのも、心強く感じられます。政府としても、日本再興戦略の中で、女性の活躍促進を重要な柱と位置付けており、科学技術の進展のためのみならず、経済の発展にとっても女性研究者の活躍が欠かせないものとなっています。その中でもトップランナーとして先導的な役割を果たす東北大学の取組がさらに深化発展されますことを期待し、それを加速する本シンポジウムのご成功を心よりお祈りいたします。



奥山 恵美子
仙台市長

東北大学での我が国初の女子学生入学100周年おめでとうございます。これはそのまま日本の女子高等教育の歴史であり、今後とも理工系分野などの強みを活かした女性リーダーの育成を期待しています。成長戦略の中核としての「女性の活躍」促進、私たちも頑張ります。

自分の可能性を信じ、図々しく、たくましく、しっかりと力強く歩んでください。未来へ羽ばたく皆さんを応援しています。

人生には、支えになるつかえ棒がいっぱいあったほうがいいですよ。仕事も、家族も、そしてなにより、友情も。親愛なる妹たちにたくさんの友情を送ります。



栗原 和枝
東北大学原子分子材料科学
高等研究機構 教授

向学心に門を開かれた百年前の女子学生の感激を思う時、女子学生の皆さんには、その志を継ぎ、現在の恵まれた環境を生かして活躍してほしいと思います。

Beyond the Bias and Barriers:
たしかな未来を拓くのは、誰でもない「あなた」です！



長谷川 真理子
総合研究大学院大学
先端科学研究科長

女子学生入学百周年記念、おめでとうございます。最近、「カラマーゾフの兄弟」の新訳を読んでいて、そこに登場する女性の描き方があまりにも女性を馬鹿にしている(と、私には思える)ので、読むのが嫌になってしまった。文豪といえども、150年前の女性観から自由ではなかったらしい。世の中は確実に変わった。女子の高等教育参加は当然のことになった。が、日本ではまだまだ、責任ある地位に進む女性の数が少ない。さまざまな職場のトップにさらに女性が進出し、もっと女性が意思決定の鍵を握るようになれば、世の中はもっと変わるはず。生き生きと活躍する女性を見れば、下の世代の人たちにも、さらに高い目標が見えてくる。そんな牽引力のある女性がどんどん輩出されていくことを期待します。



千代延(石川) 仁子
サイエンス・エンジェルOG

2012年12月に『理系(リケ)女子(ジョ)的生き方のススメ』という本を出版しました。理系女子的とは、「理系的」と「女子的」を組み合わせた私の造語です。理系的とは、なにごとにも好奇心を持ち、ものごとを論理的、分析的に深掘りしていくこと。女子的とは、友達とワイワイ集まる女子会のように、互いを尊重しながら楽しんでしまえること。自分のやりたいことを見つけて、周りを巻き込み和気あいあいと、職場や生活環境などをよりよい方向に変えていく。いろいろな人が集まってアイデアを出し合い、お互いを高め合う生き方、それがリケジョの生き方です。みなさんは、どのような社会が、世界が理想だと考えますか？ それを実現するためにあなたは何をやるのか。自分のやりたいことを見つけて、まわりを巻き込みながら、楽しく生きる。それがいま、よりよい未来を創っていくために、老若男女を問わず求められています。

未来のリケジョの皆さんへ
分野が違えど女の子の悩みはだいたい同じです。男性社会で頑張る女性はたくさんいます。ネットワークをつくり自分の世界を広げることで、悩みも解決できます。恐れず一歩を踏み出してみてください



長濱 祐美
サイエンス・エンジェルOG

男だとか女だとか、年が上とか下とか、性別も年齢も関係なく、個人が個人として生き生きと過ごせる時代はもうすぐそこまで来ています。自分自身が「やってみたいこと」「仕事にしたいこと」そして、「こうやって生きていきたい」と思っていること、実現できるように一緒に頑張りましょう。

未来のリケジョの皆さんへ
大学を卒業してから、社会で頑張る同じような年代の女性の仲間助けられていると、つくづく感じます。キャリアやライフプランについて相談したり、励まし合ったり、仲間の生き方が刺激になることも。リケジョ仲間の輪を大切に、これからも輝いていってください。



佐村 知子
内閣府
男女共同参画局長



水野 紀子
東北大学大学院
法学研究科 教授



大坪 久子
元日本大学総合科学研究所
教授



美馬 のゆり
公立はこだて未来大学
情報アーキテクチャ学科 教授



柿崎 真沙子
サイエンス・エンジェルOG

東北大学における男女共同参画推進のための取り組み

平成13年度

- ・東北大学男女共同参画委員会の開設。
- ・「東北大学における男女共同参画推進の方針に関する提案」提出。

平成14年度

- ・「第1回男女共同参画シンポジウム：学問・教育と男女共同参画」開催。
- ・「男女共同参画推進のための東北大学宣言」発表。

平成15年度

- ・21世紀 COE プログラム「男女共同参画社会の法と政策」が採択(実施期間5年)。
- ・男女共同参画奨励賞(通称：沢柳賞)を創設。
- ・「第2回男女共同参画シンポジウム：性差とは何か？ヒトと人のあいだ」、併せて沢柳賞第1回授賞式開催。
- ・各部局に「男女共同参画ワーキンググループ」を設置。

平成16年度

- ・「第3回男女共同参画シンポジウム：現代日本社会とジェンダー」、併せて沢柳賞第2回授賞式開催。

平成17年度

- ・学内保育所「川内けやき保育園」開設。
- ・「第4回男女共同参画シンポジウム：どこまで進んだ大学の男女共同参画」、併せて沢柳賞第3回授賞式開催。

平成18年度

- ・科学技術振興調整費・女性研究者支援モデル育成「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」が採択(実施期間：3年)。特定領域研究推進センター「女性研究者育成支援推進室」を設置し、各種支援制度を展開。
- ・「第5回男女共同参画シンポジウム：大学における女性研究者の育成と支援、その施策」、併せて沢柳賞第4回授賞式開催。



平成19年度

- ・「育児のための短時間勤務制度」試行実施。
- ・「育児休業等の取得による任期の延長」の検討。
- ・仙台Iゾンクラブからの寄附金により、東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業(通称：ローズ支援事業)を実施(実施期間：5年)。
- ・「第6回男女共同参画シンポジウム：イノベーションを生み出す男女共同参画」、併せて沢柳賞第5回授賞式開催。

平成20年度

- ・グローバル COE「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」が採択(実施期間：5年)。
- ・「育児のための短時間勤務制度」、「育児休業等の取得による任期の延長」制度化。
- ・「第7回男女共同参画シンポジウム：大学の男女共同参画－見えない壁を打ち破るには－」、併せて沢柳賞第6回授賞式開催。
- ・「第二保育園設置に関するアンケート調査」実施。

平成21年度

- ・「第8回男女共同参画シンポジウム：東北大学男女共同参画の現状～本音で語る課題と展望～」、併せて沢柳賞第7回授賞式開催。
- ・科学技術振興調整費・女性研究者養成システム改革加速「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」が採択(実施期間：5年)。
- ・学内経費による「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」を開始。
- ・2つ目の学内保育所となる「星の子保育園」を星陵地区に設置。



平成22年度

- ・「第9回男女共同参画シンポジウム：男女共同参画政策と大学の使命」、併せて沢柳賞第8回授賞式開催。

平成23年度

- ・東北大学サイエンス・エンジェルがロレアル・ユネスコ女性科学者日本奨励賞特別賞受賞。

平成24年度

- ・仙台Iゾンクラブからの寄附金継続により、仙台Iゾンクラブ 東北大学大学院女子学生海外渡航支援事業を実施。
- ・「第10回男女共同参画シンポジウム：三度さきがけを目指す、東北大学における男女共同参画の新たな展望」、併せて沢柳賞第9回、第10回授賞式開催。



左から3番目が小谷元子教授、左2名がサイエンス・エンジェル

平成25年度

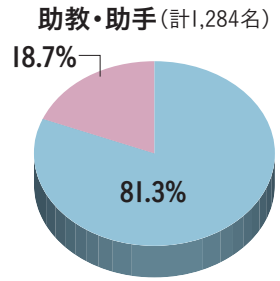
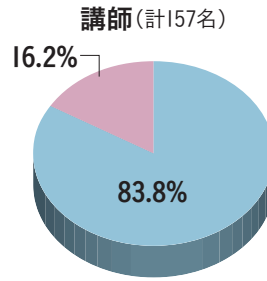
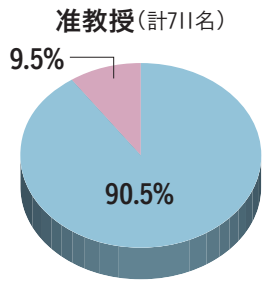
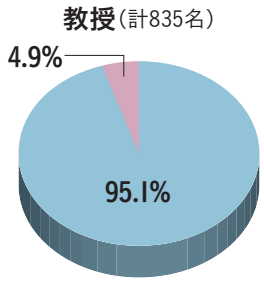
- ・東北大学女子学生入学100周年記念事業を展開。
- ・東北大学における男女共同参画推進のための行動指針を発信。



東北大学における男女構成比と推移 平成25年5月1日現在

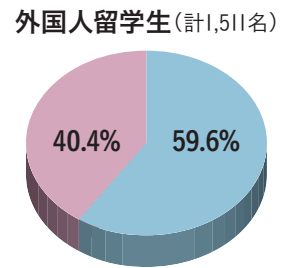
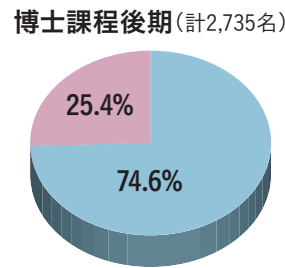
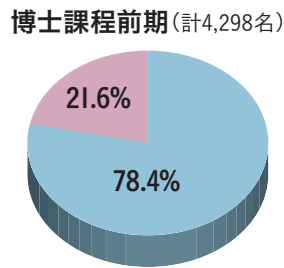
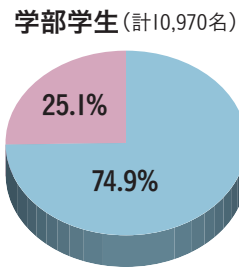
教員男女構成比

■ 男性 ■ 女性



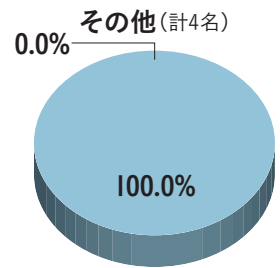
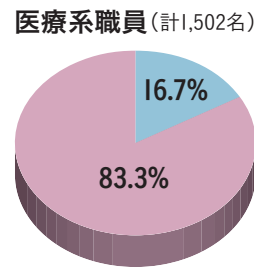
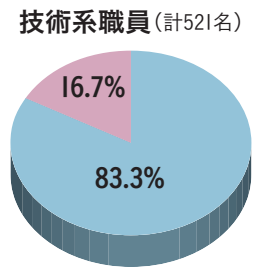
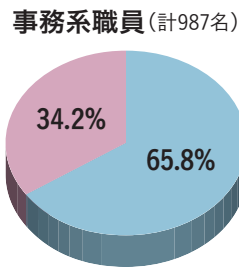
学生男女構成比

■ 男性 ■ 女性



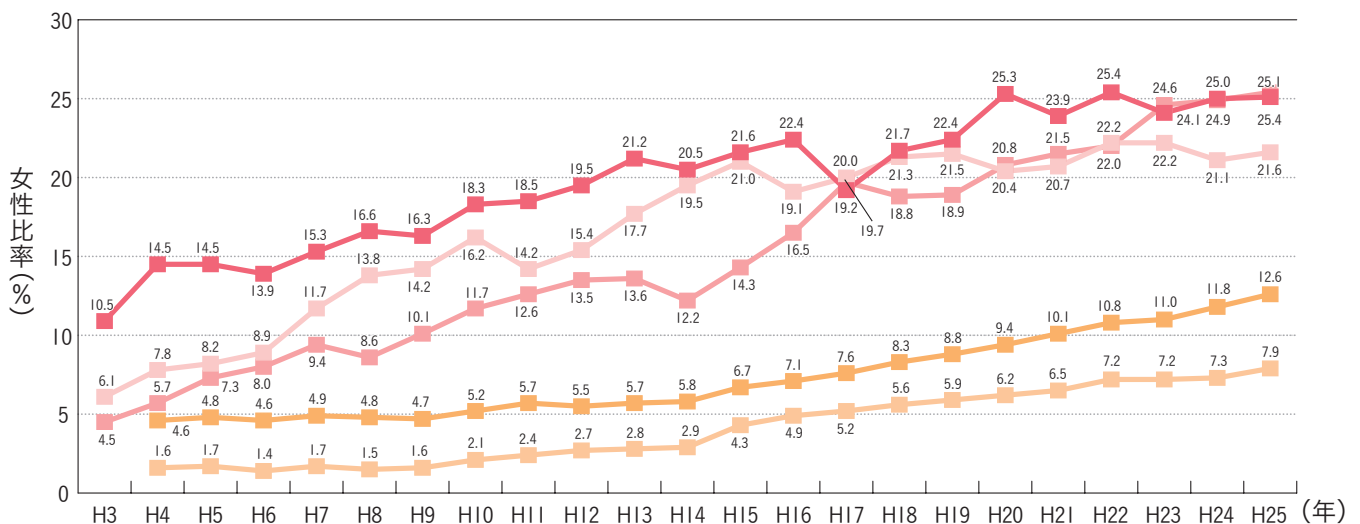
職員男女構成比

■ 男性 ■ 女性



男女構成比推移

■ 学士 ■ 修士 ■ 博士 ■ 教員(助教・助手含む) ■ 教員(助教・助手除く)



東北大学における 男女共同参画推進のための行動指針

平成25年8月8日

東北大学は、1913年に日本で初めて女子学生3名の入学を許可した。その3名はやがて女性初の学士になるなど、本学は女性研究者育成の歴史に大きな足跡を残している。そのような歴史の中、戦前にあっては学問を志す全国の女性が「学都仙台」に集い、本学は帝国大学の中で最も多くの女子学生を輩出した。

そして、2001年に全国に先駆けて東北大学男女共同参画委員会を発足させ、「男女共同参画のための東北大学宣言」(2002年)のもと、全学的な男女共同参画の推進に向けた活動として、学内の環境整備や意識改革、学内外広報等に努めてきた。

また、2003年度に21世紀COE「男女共同参画社会の法と政策」が、2008年度にはその成果を発展させたグローバルCOE「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」が採択された。これらは、男女共同参画とダイバーシティ研究・教育のためのプログラムであり、研究・教育における男女共同参画の取り組みも全国に先駆けて進めている。

自然科学系分野では、2006年度から「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」を展開し、環境整備や次世代育成等に取り組むとともに、2009年度からは「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」により、理工農学分野の女性研究者の採用を促進し、そのリーダー育成を推進している。

このように、男女共同参画の包括的推進(理論整備・活動支援)において、我が国をリードする活動を展開している本学は、女子学生入学100年の歴史と背景をもとに、建学以来の理念の一つである「門戸開放」を継承する男女共同参画について、今後10年間の行動指針として以下の7項目を策定する。

● 両立支援・環境整備

本学構成員が、年齢性別等を問わず、仕事や学業と生活との両立を図ることができるように、意識の醸成に努め、子育て支援のための学内施設の充実や介護支援を含めた制度等の環境整備と周知を進める。

● 女性リーダー育成

アカデミアにおける男女共同参画の推進に向けて、女性研究者を積極的に採用・養成し、さらに学内および学会・社会のリーダーとして飛躍させるための支援・登用制度を整備する。

● 次世代育成

将来性豊かな次世代女性研究者を輩出するために、サイエンス・エンジェル(SA)活動を継続・発展することなどにより、学部生・大学院生を対象とした研究者使命の意識啓発と醸成に努め、さらに実体験を通して育成する施策を推進する。

● 顕彰制度

アカデミアにおける男女共同参画の先駆として、各分野で活躍し多大な貢献をなした方々を選考し顕彰するため、新たな「東北大学男女共同参画賞」を創設する。

● 地域連携

東北地方の中心に位置する大学として、東北地方の多くの大学、行政機関等との連携を進め、地域発展や震災復興事業等における男女共同参画を推進する。

● 国際化対応

ワールドクラスへの飛躍に向けて、グローバルな研究・教育体制に相応しい、外国人研究者・留学生を対象とした様々な両立支援策を講じ、国際的観点に基づいて学内の男女共同参画を推進する。

● 支援推進体制

上記の男女共同参画活動を円滑に推進するために、男女共同参画担当理事(若しくは副学長)と総長特別補佐(男女共同参画担当)を置き、さらに「男女共同参画推進センター(仮称)」などの恒常的支援体制を整備する。